

弥生三月、この太平台にも暖かな風が吹き始め、春の息吹が感じられる今日の佳き日に、國學院大學栃木学園理事長木村好成先生、学事顧問川福基之先生のご臨席を賜り、第二十二回國學院大學栃木中学校卒業式を挙げていただけますことは、この上ない慶びであります。関係の皆様方には心より厚く御礼申し上げます。

二十二期生29名の卒業生の皆さん、卒業おめでとう。皆さんは平成29年4月に入学して3年、校訓の「たくましく 直く 明るく さわやかに」を胸に、学習を始め学校行事、部活動、そして生徒会活動など様々なことに積極的に取り組むことで自分を磨き、良き学校づくりのために頑張ってきました。今日、このように卒業という日を迎えることができたのは、皆さん自身の努力の賜物です。しかしながら、陰となって皆さんを支え、励まし支援して下さった多くの方々のお陰があったことを忘れてはなりません。まず、今日は家に帰って、ご家族に心を込めて「ありがとう」と言ってください。

今、皆さんは、三年間の様々な出来事が脳裏を駆け巡っていることと思います。楽しかったことはもちろんのこと、苦しかったことや悔しかったことも含め、そのすべてが、かけがえのない思い出の日々であったと思います。

それは私にとっても同じことであり、皆さんを見守っていて、とても印象深い場面がいくつもありました。特に今年度の國學院祭の文化祭・体育祭、リーダーシップを發揮し、後輩たちの指導をしながら作り上げたディズニー・キャラクターの展示物、自分たちで企画、脚本、演出など全てをこなし、最上級生としての自主性や積極性を見せてくれた「ドラえもん」の劇と合唱、時間がない中、素晴らしいものに仕上げる事が出来ました。体育祭においても、心合わせて何回も跳んだ大縄跳び、そしてリレーや集団演技の真剣に取り組む姿は、「若者の美しさ」そのものでした。それら全てが、一・二年生を始め教職員にも感動を与えてくれたのです。宿泊を伴う行事でも、私がとても嬉しく感じたことがありました。校外学習の宿泊先でのことです。皆さんは、「5分前行動」などが、しっかり身につけており、従業員の方に「はじめある純粋な生徒さんたちですね」というお褒めの言葉をいただきました。

さらに、毎日の生活の中でも、朝早く、また放課後遅くまで教室や教育センターで集中して学習する姿や積極的に先生方に質問している姿もよく見てきました。授業でも食い入るように説明を聴く姿、仲間と教え合う姿、大きな声で自信を持って発言する姿には、毎日を懸命に頑張ろうというエネルギーを感じることが出来ました。

そして、何より心に残ったのは、どのような遠くにいても大きな声で、時には後ろからでも聞こえてくる挨拶でした。しかも、その挨拶にはよく笑顔が見られたのです。私はあらためて「当たり前のことを当たり前でできる人」に成長した皆さんを、心から誇りに思います。加えて、オーストラリアホームステイ語学研修で学んで来たこと、それをこれからの学校生活でどう見せてくれるのかも楽しみにしています。

さて、卒業は皆さんにとって、中学校の学業の全てが修了したことと共に、9年間の義務教育が終了し、自らの責任において「次の段階に進み、さらに高みに向かう出発点」と言えます。そのスタートの第一歩を踏み出すにあたり、こういう人になってほしいと思うことを三点ほどお話しし、はなむけの言葉としたいと思います。

皆さんの三年次のホームルーム目標は「至誠一貫」でした。一つ目は、まさにその目標である、「常に誠実で正直な人であれ」ということです。人は岐路に立たされた時に、迷うことがあります。しかし、その時、人として正しいと思うことを選べば間違いはありません。毎日を正々堂々と自信を持って過ごせるように、人との信義や社会のルールを守り、自分を偽ることなく明るく、正直に生きてください。皆さんを中庭で見守り続けてくださっている初代高等学校長佐々木周二先生のお言葉です。「どのような困難に直面しても、それを打開してくれるものは、窮極は人間の至誠 一 つまりこの上なく誠実であること 一 である。これあるところ必ずや希望の道は開け、強く明るく歩み続けることができることを堅く信じて疑わない」。

ところで、今年の10月、台風19号が多く地域・人々を襲いました。この栃木市の被害も甚大なものであり、学校も数日に渡って休校せざるを得ませんでした。皆さんの中にも被災した人もいますし、交通機関も大きな被害を受け、多くの方が通学に苦労しました。数か月経った今でも、街や人の暮らしは完全に立ち直ったとは言えません。しかし、そうした状況の中でも、私たちの心を救ってくれることがあるものです。実にたくさんの方がボランティアに携わり、國學院栃木の高校生たちも市内清掃や募金を行いました。そのため、何通ものお礼の手紙が寄せられたり、何人もの方にお礼の電話をいただきました。人が人のために尽くす大切さを、あらためて知ることができました。皆さんの立志式の作文に、こう書いた人がいます。「私や周りの人がこの世界に生まれたのは必ず意味があるはずだと思います。その一つが、働いて社会に貢献することなのではないか。そう考えると納得できます。なぜならこの世界は多くの人々の手によって支えられていて、自分の生活も周りの人々のお陰で成り立っていると思うからです」。自分が人や社会のために何が出来るのかを真剣に考え、大きな夢、高い志を持った人間であってほしいと思います。二つ目は、「人のために尽くす、社会に貢献する人であれ」ということです。

三つ目は、「困難に耐え、それを克服する強さを持った人であれ」ということです。今年度は、台風十九号の自然災害に加え、現在、ウイルス感染拡大の恐れという被害に遭い、登校どころか外出もままならない日々を送るといような「受難の年」となってしまいました。しかし、嘆くばかりでは何も生まれません。世の中には、このように自分ではどうすることも出来ないことにぶつかることもあります。そのような時は、じっと耐えてトンネルを抜けるのを待つしかありません。そして今、出来ることを考え、次の段階への準備をしっかりと行い、来るべき時に備えることです。そうしたからこそ出来ること、そうしたからこそ付いた力というものがあるはずで、マイナスをプラスに変えるぞという気概を持つことが大切です。人は楽しい時や嬉しい時より、むしろ苦しい時や辛い時の踏ん張りにこそ、その真価が表れます。困難を越える度に人は強くなっていきます。皆さんはこの三年間で様々な経験をし、十分にその土台を築いてきました。しっかりと踏ん張っていきましょう。

最後に、皆さんが以前書いた作文の一節を紹介し、結びにしたいと思います。作文にあるような皆に共通する思いを大事にしながら、これからの道のりを歩んで行ってくだ

さい。

「母に言われたことがある。『何もしてくれなくていい。親に心配をかけずに、他人に迷惑をかけずに、自立して生活ができるようになってくれたら、それが一番の親孝行』、他人に迷惑をかけないようにすることはもちろんだが、将来の夢を叶えて立派な大人になり、これまでお世話になった方々に恩返しをしたいと思う。もちろん、いつも僕を支えてくれている両親、祖母にも。これまでも、そしてこれからもたくさんの愛情を注ぎ、見守ってくれている家族に感謝をし、夢に向かって進んでいきたい」。

以上、式辞といたします。

令和二年三月十四日  
國學院大學栃木中学校  
校長 青木一男